

鞠智城跡・土塁の構築とその特徴

矢野裕介

1. 鞠智城跡・外郭線の概要

鞠智城跡は、熊本県の北部、阿蘇の北外輪山から有明海へと西流する菊池川の中流域に位置する古代山城で、東アジア情勢が緊迫する7世紀後半、唐・新羅の日本への侵攻に備え、大宰府防衛を目的に構築された城塞の一つに数えられる。『続日本紀』文武二（698）年五月条「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治せしむ。」との修繕記事を初見とし、その後、『日本文徳天皇実録』天安二（858）年二・六月条及び『日本三代実録』元慶三（879）年三月条に「菊池城院」あるいは「菊池郡城院」として記述が認められる国史記載の城跡で、城の機能・性格に変化を生じさせながら7世紀後半から10世紀の中頃までのおよそ3世紀にわたって存続したことが明らかとなっている。

この鞠智城跡は、県境を限る筑肥山地の主峰八方ヶ岳（標高1052 m）の南西麓に発達した丘陵地帯の南端近く、中心標高145 m前後の通称「米原台地」を中心に立地する。その城域については早くから広域説、狭域説が論じられてきたが、現在では、狭域説の中でも特に土塁線と崖線で囲繞される周長3.5km、面積55ha、標高90～171 mの範囲を内城地区として真の城域とする。その城域は、南を台地南端から西方向に延びる丘陵尾根（南側土塁線を含む）、西を台地西端から北方向に延びる丘陵尾根（西側土塁線を含む）、東を台地東縁の崖線、北と南西隅で谷部を渡る外郭線で囲繞されており、城域南側となる深迫、堀切、池ノ尾の外郭線上に城門が所在する（第1図）。

古代山城では、外郭線上に土塁、石塁といった遮蔽施設を設けて防御ラインを形成するのが通例であるが、鞠智城跡においても、昭和42（1967）年度からの発掘調査により、西側土塁線の北端部（佐官どん地区）及び南側土塁線の西・東端部において土塁が検出され、城門周辺でも、深迫、堀切で土塁、池ノ尾で石塁がそれぞれ検出されている。なかでも西側土塁線北端部及び深迫門周辺部では、土塁の構築過程を推測できるまでの成果が得られており、前面柱穴列の存在から版築工法によるものであることが明らかとなっている。

2. 各地点における外郭構造

鞠智城跡の本格的な学術調査は、昭和42（1967）年度の第1次調査に始まり、平成22（2010）年度までに32次を数える。これまでの調査で、外郭線上の各地点において土塁・石塁を検出してきたが、特に土塁についてはそれが立地する場所や自然地形などを要因として、その形状や構造、材質などに差異が認められる。ここでは、こうした各地点における外郭構造について、発掘調査の経緯とともに概観する。

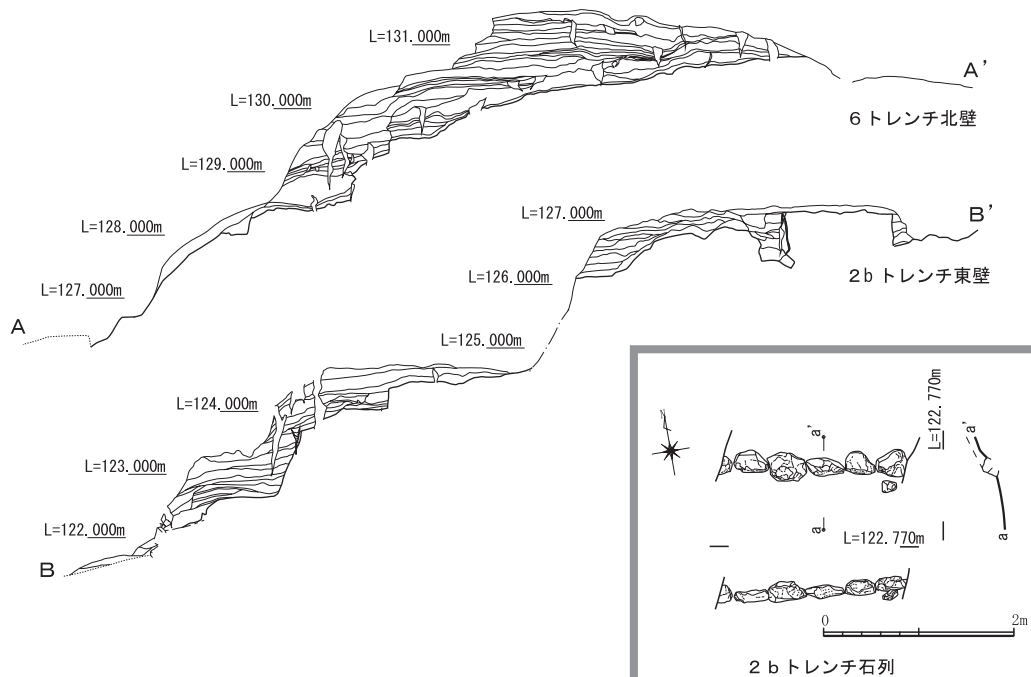
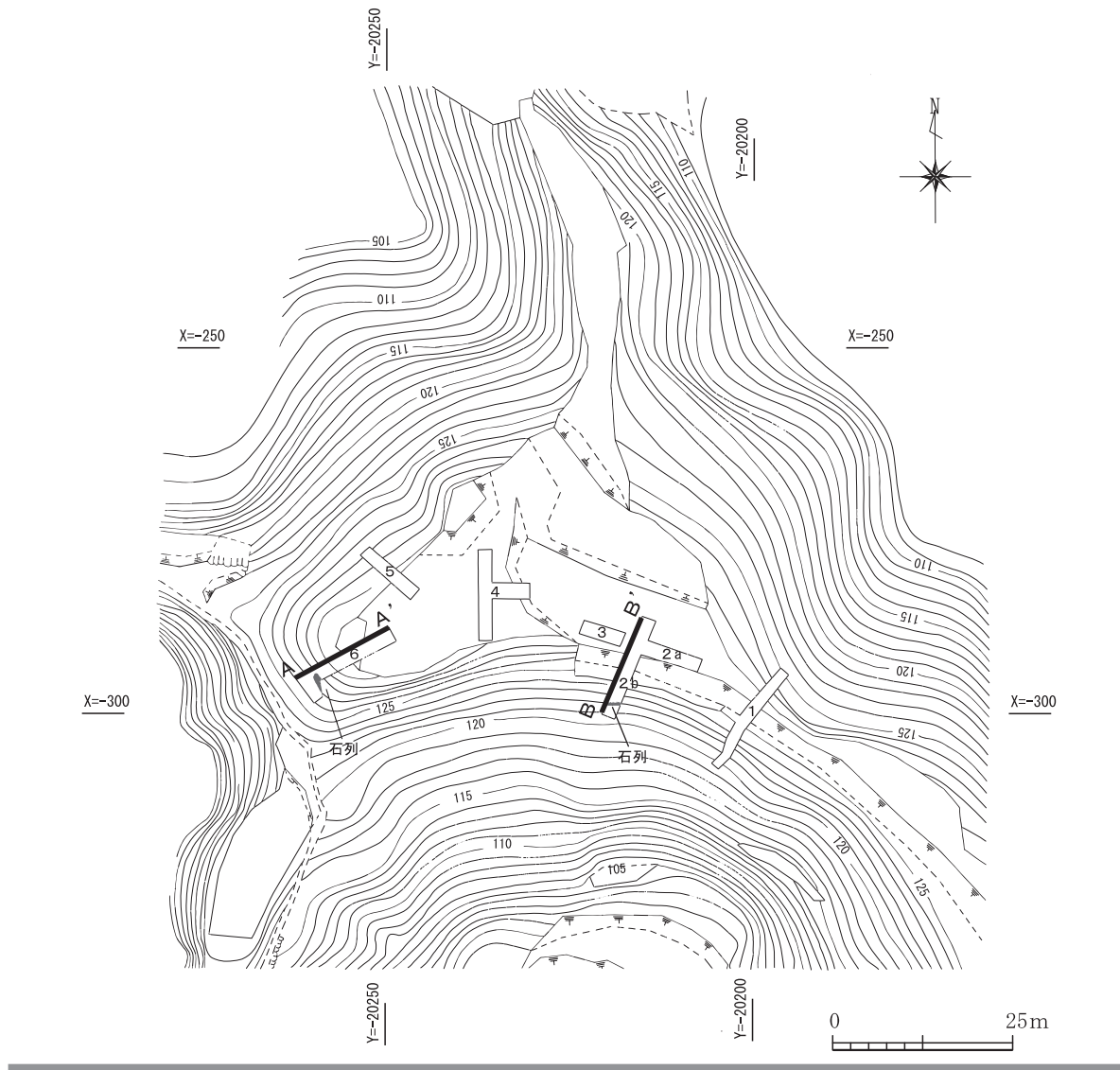
（1）南側土塁線西端部・東端部（第2、3図）

南側土塁線は、米原台地の台地南端から西方向に延びる丘陵尾根のうち、堀切門跡以西の標高120～130 mの尾根筋に位置する。丘陵の支脈が5箇所、城外となる南に向かって派生する関係で、内外に凹凸のある襷状の線形を呈しており、それら支脈の基点に狭小な平坦部が所在する。その基盤面は阿蘇溶結凝灰岩（Aso-4）で、丘陵尾根の外斜面には比高差約20～30 mの切り立った崖地が形成されている。

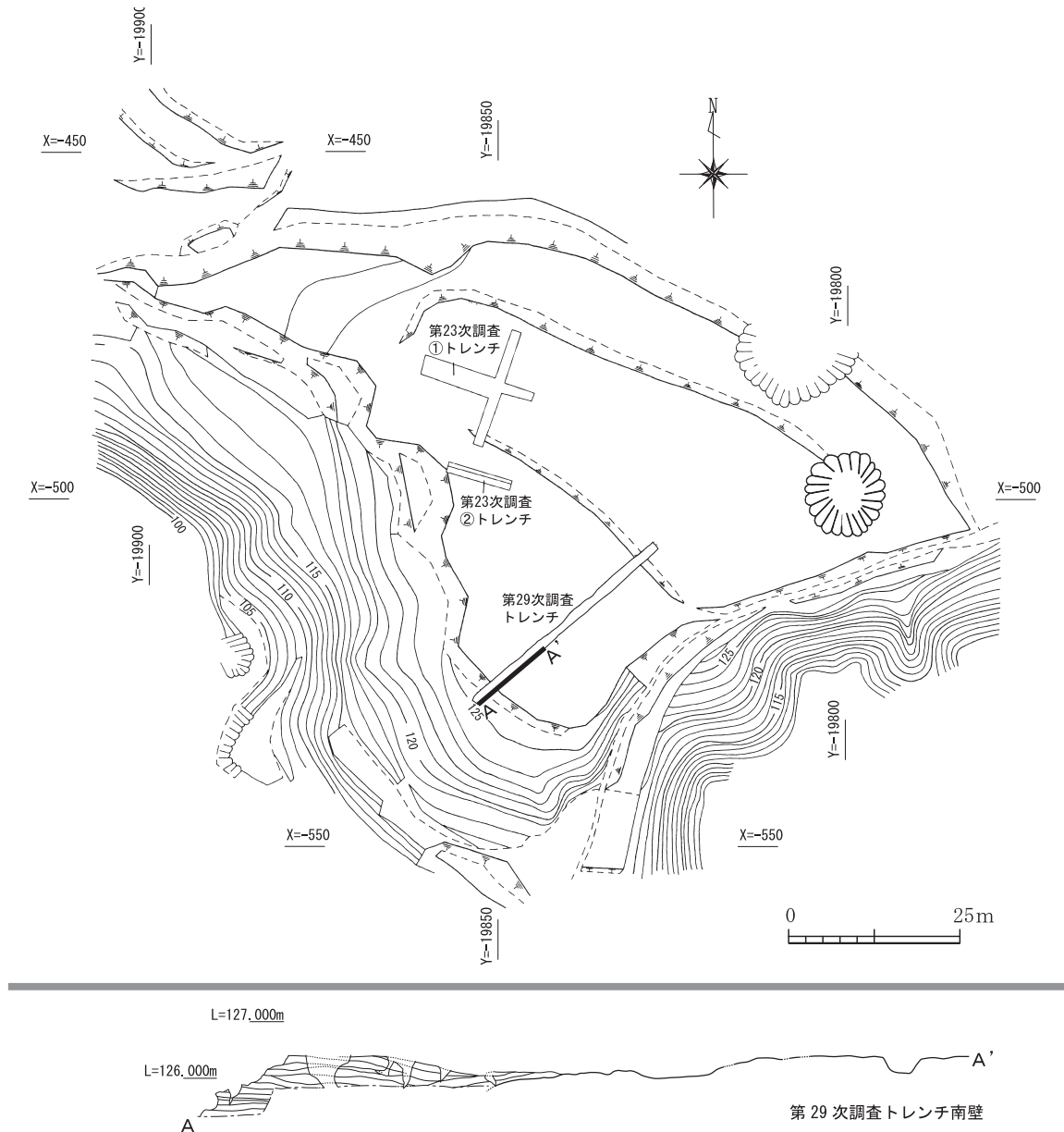
平成13（2001）年度の第23次調査では、その南側土塁線の西端部（B地点）の調査を実施しており、丘陵尾根の延長70 mの外斜面上に設定した4本のトレンチからそれぞれ土塁が検出された（23次B地点1・2b・5・6 トレンチ）。土塁の規模は、残存高約5.0～8.0 m、奥行約5.0～9.0 mを測り、このうち、南面する土塁については、下段を盛土、上段を削りだしと盛土の併用で整形して中位にテラスを持つ2段構造と



第1図 鞠智城跡全体図



第2図 南側土塁線西端部（B地点）



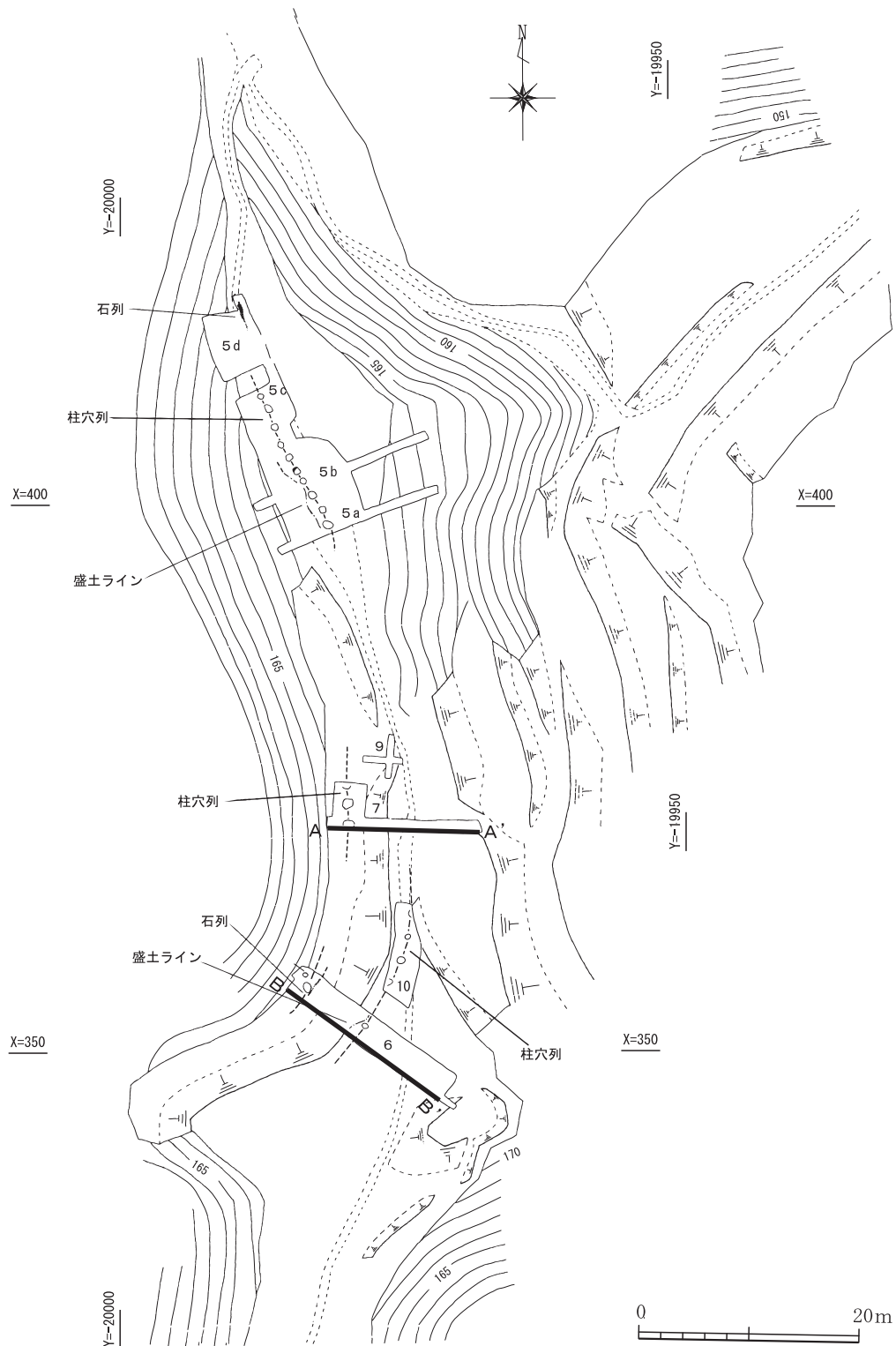
第3図 南側土塁線東端部（A地点）

なることが特徴として挙げられる（23次B地点1・2bトレンチ）。盛土は、黒褐色、赤褐色、灰褐色などの粘質土で構成され、各層緻密であるもののさほどしまりがなく傾向にあり、土塁裾部の一部に、約30～40cm大の阿蘇溶結凝灰岩6石で構成される石列が認められる（23次B地点2bトレンチ）。また、土塁頂部に2基の柱穴が検出されているが、土塁頂部に列状に配置されたものかどうかは明らかとなっていない（23次B地点1、2bトレンチ）。

平成19（2007）年度の第29次調査で実施した南側土塁線東端部（A地点）の調査では、南西方向に派生する支脈の基点となる平坦部の南端で土塁盛土を検出した（29次A地点トレンチ）。土塁頂部から下に約1.0mまでの盛土を検出するにとどまる調査であったが、盛土については、上層は黄褐色系の粘質土、その下層はやや粘質の褐色系土と阿蘇溶結凝灰岩の土壌化したものを材質とする点で、西端部の盛土とその構成に違いを見せる。

（2）西側土塁線北端部（佐官どん）（第4、5図）

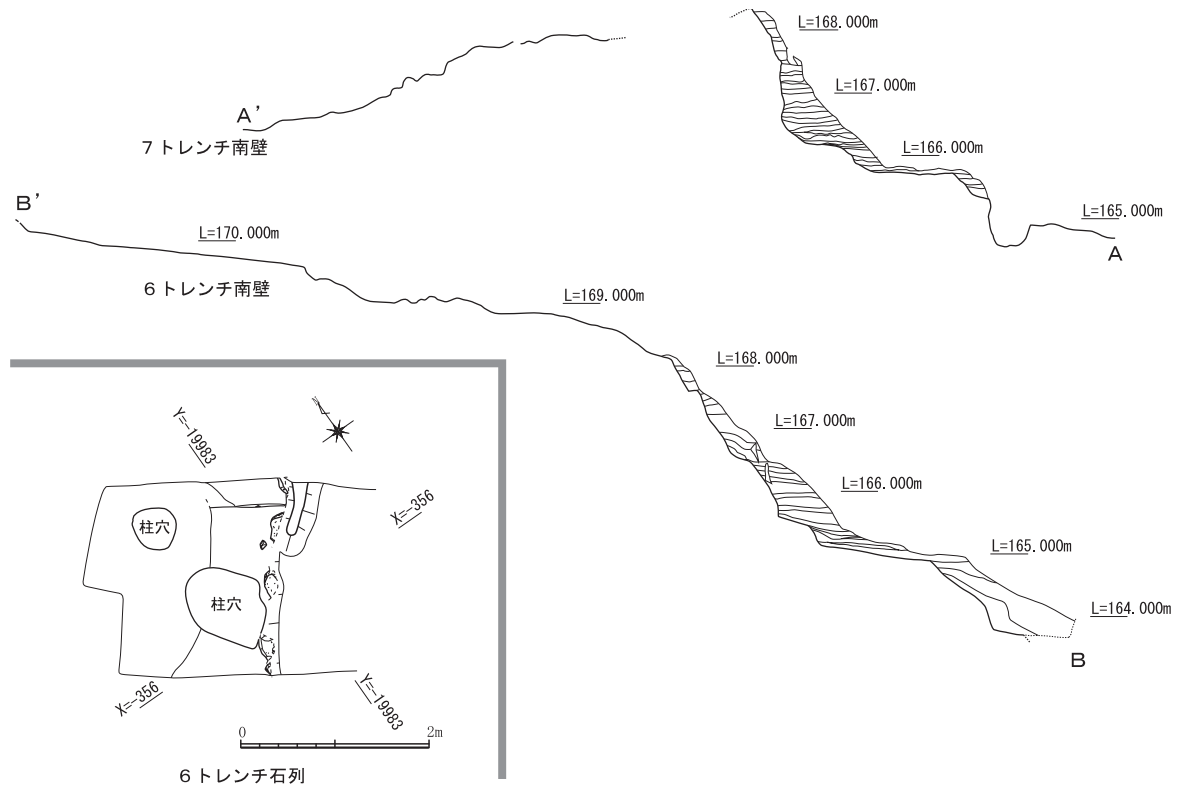
西側土塁線は、米原台地の台地西端から北側に延びる標高150～171mの丘陵尾根筋に位置する。南か



第4図 西側土塁線北端部（佐官どん）①

ら「灰塚」、「涼みヶ御所」、「佐官どん」といった地名が残る頂が連なる起伏に富んだ地形で、全体的には南から北へ徐々に高まり、その北端となる「佐官どん」で標高 171 m の城内最高点に到達する。城外側となる西斜面は支脈部分を除き急峻な傾斜となり、城内となる東斜面も凹凸のある複雑な地形が形成されている。その基盤面は、花崗岩バイラン土となる。

昭和 43（1968）年度の第 3 次調査では、土塁線北端部（佐官どん）突端の平坦部の調査を実施し、鞠智



第5図 西側土塁線北端部（佐官どん）②

城跡で初となる盛土整形による土塁を検出する成果を挙げている。調査地点に散在する花崗岩の石群を建物礎石と捉えての建物遺構の把握を目的とする調査であったが、それら石群の西側に位置する帯状の高まりが花崗岩バイラン土を材質とする縞状の盛土であることが確認されたのである。しかしながら、当時、鞠智城跡における土塁の多くは、丘陵尾根の自然地形を利用しながら、削りだし整形により外斜面を急に、内側に通路状の平坦面を造り出すといった特有の工法が採用されたものと認識されていたため、この盛土整形による土塁については、丘陵尾根が途切れる平坦部のみの構築と理解された。第3次調査では、このほか、外郭線の想定ラインのうち比較的土塁の原形を留めている計13箇所（西側土塁線10箇所、深迫地区1箇所、堀切地区1箇所、南側土塁線1箇所）の横断面測量も行われたが、その結果、西側土塁線においては、前述の土塁形状のほか、丘陵尾根の外・内斜面を断崖状に削りだし、尾根頂部を平坦に整形する断面梯形の土塁の存在も指摘された。その後、平成4（1992）年度の第14次調査では、「灰塚」～「佐官どん」の図化作業（延長545m）とともに一部断ち割り調査が実施されたが、結果的に盛土整形による土塁を検出できず、土塁の構築法の解明にまでは至っていない。

こうしたなか、平成15（2003）年度の第25次調査で実施した西側土塁線北端部（佐官どん）の調査で、丘陵尾根の延長50mの外斜面上に設定した5本のトレンチ（25次5a、5b、6、7、9トレンチ）から盛土整形による土塁が検出された。土塁の規模は残存高約2.5～3.3m、幅3.0～6.0mを測り、花崗岩の地山を鈎状に切土し、その切土面に依拠して盛土する内托構造が明らかとなった（25次6・7トレンチ）。盛土については、花崗岩バイラン土を基本とするが、土塁頂部近くはやや粘性を帯びた土で構成されており、土塁裾部には、盛土に半分被覆された花崗岩割石が約20～40cmの間隔で計4石並ぶ石列が認められた（25次6トレンチ）。さらに、土塁の前面及び背面にそれぞれ柱穴列が検出されたことから、版築による盛土整形が明らかとなった。土塁前面の柱穴列は計4基検出され、そのうち3基は芯々で約2.1mとそれ以下の間隔で配置される（25次6・7トレンチ）。一方、土塁背面の柱穴列は計15基が検出され、芯々で約1.3～2.3mの間隔で配置された状況が認められた（25次5・6・10トレンチ）。また、西側土塁線は、その端

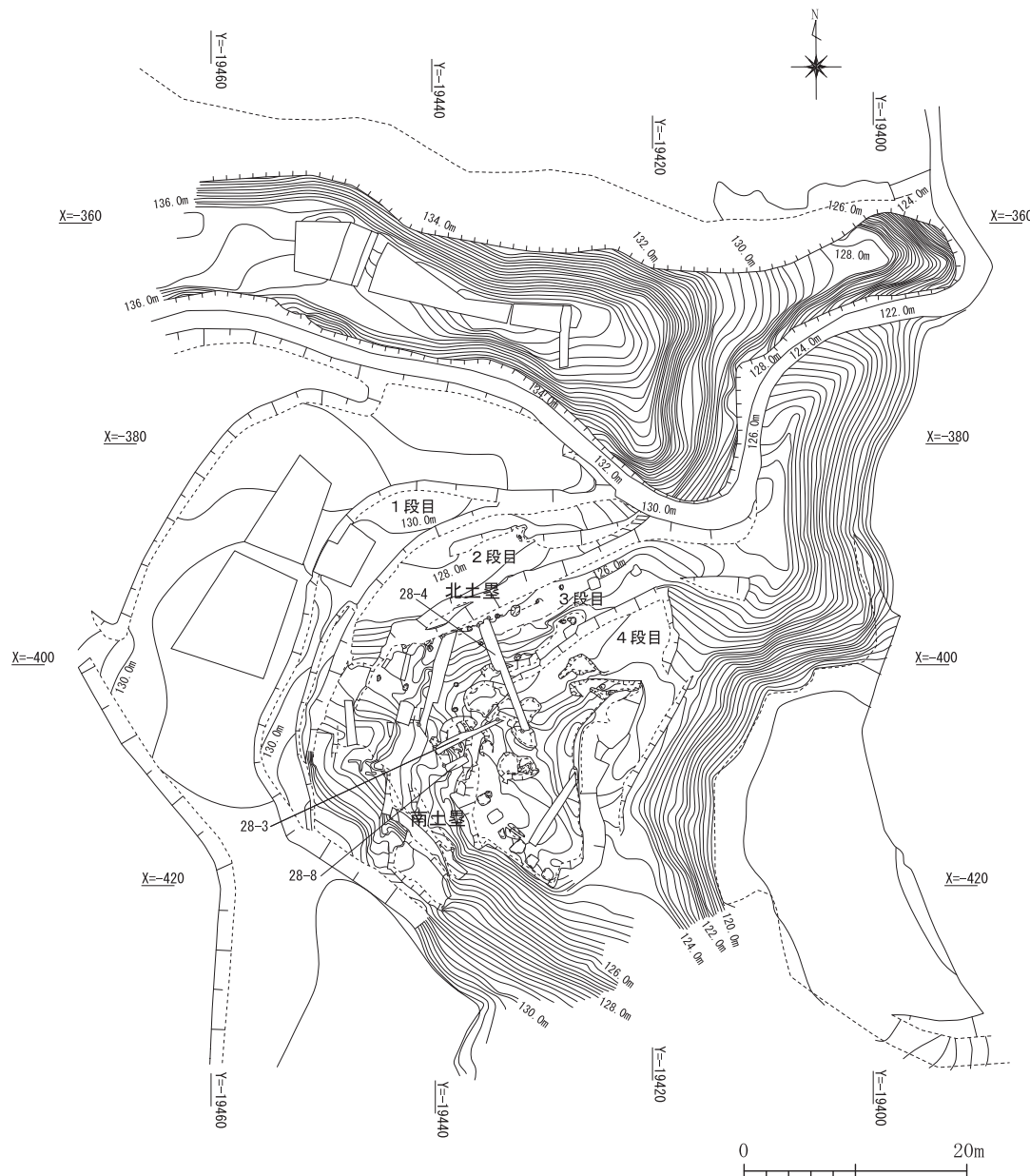
部に向かって比較的急な斜面を下り、第3次調査時の平坦部へと至るのであるが、その斜面上の土塁背面から約16～75cm大の花崗岩割石による石列が約2.9m分検出されている（25次5dトレンチ）。

（3）深迫門跡周辺（第6、7図）

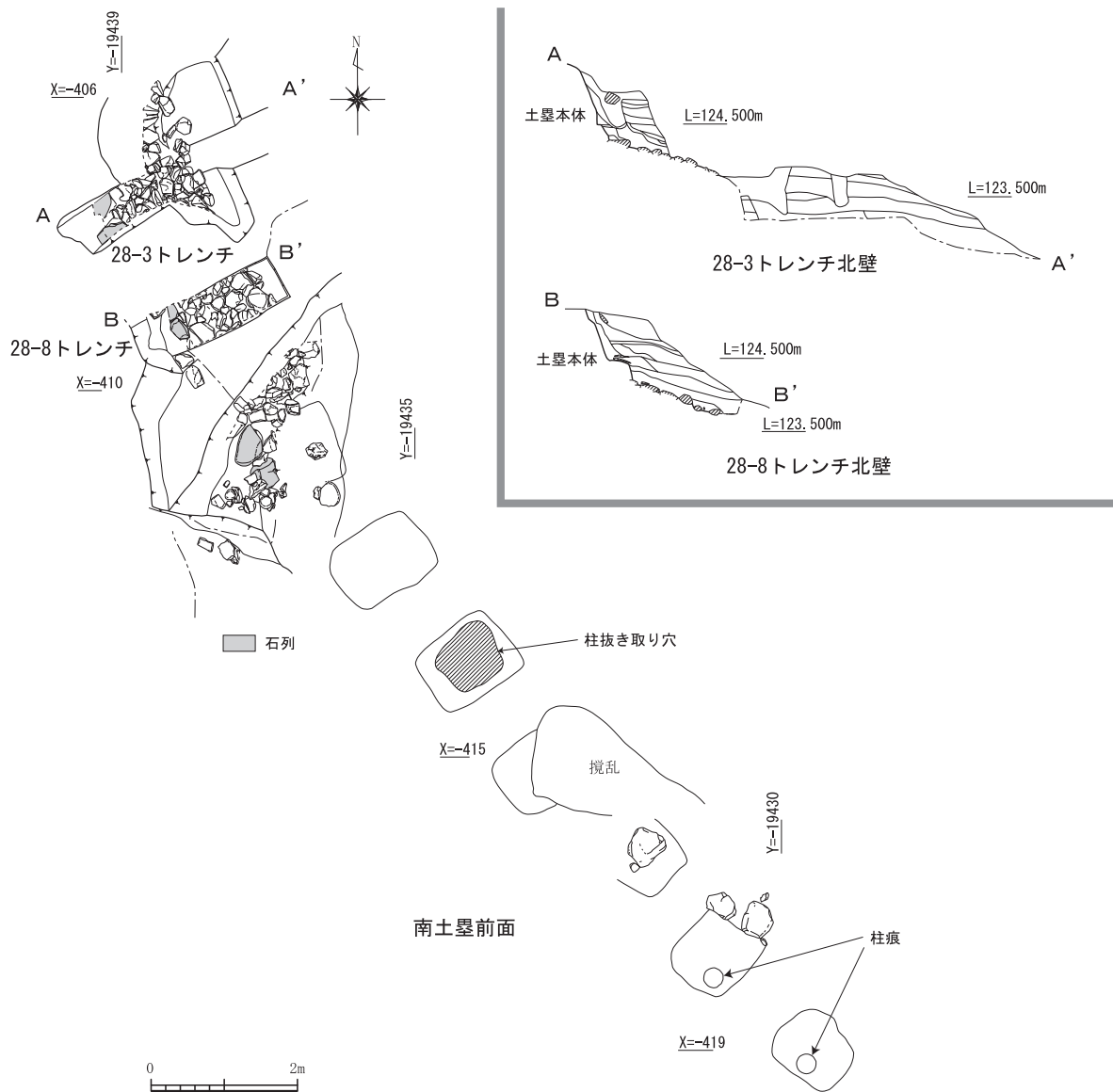
深迫門跡は、南の外郭線がその東端で北に向きを変える城域の南東隅、東方向に開口する谷部の谷頭近くに位置する。周辺は後世に段々畑として造成されている関係で段地形が残り、その中央窪み部分に城門が推定されている。

平成6（1994）年度の第16次調査で、谷部を遮蔽する形で南北に延びる盛土整形による土塁が検出され、盛土層の緻密さから版築工法によるものと推定され、平成18（2006）年度の第28次調査では、その南北に延びる土塁が城門推定箇所を挟んでL字形に配置された状況が把握されるとともに、土塁前面の柱穴列の存在から版築による盛土整形であることが明らかとなった。

南北に延びる土塁の規模は、一部残る盛土の範囲から、南土塁で残存高約4.0m、幅約6.7m、北土塁で残存高約4.0m、幅約15.0mを測る。盛土については、茶褐色・黒褐色・浅黄橙色などの粘質土で構成さ



第6図 深迫門跡①



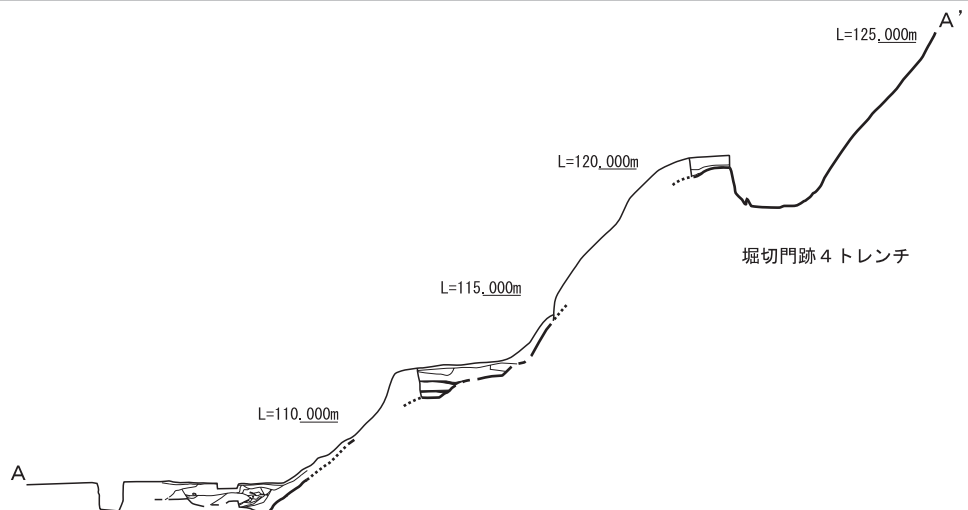
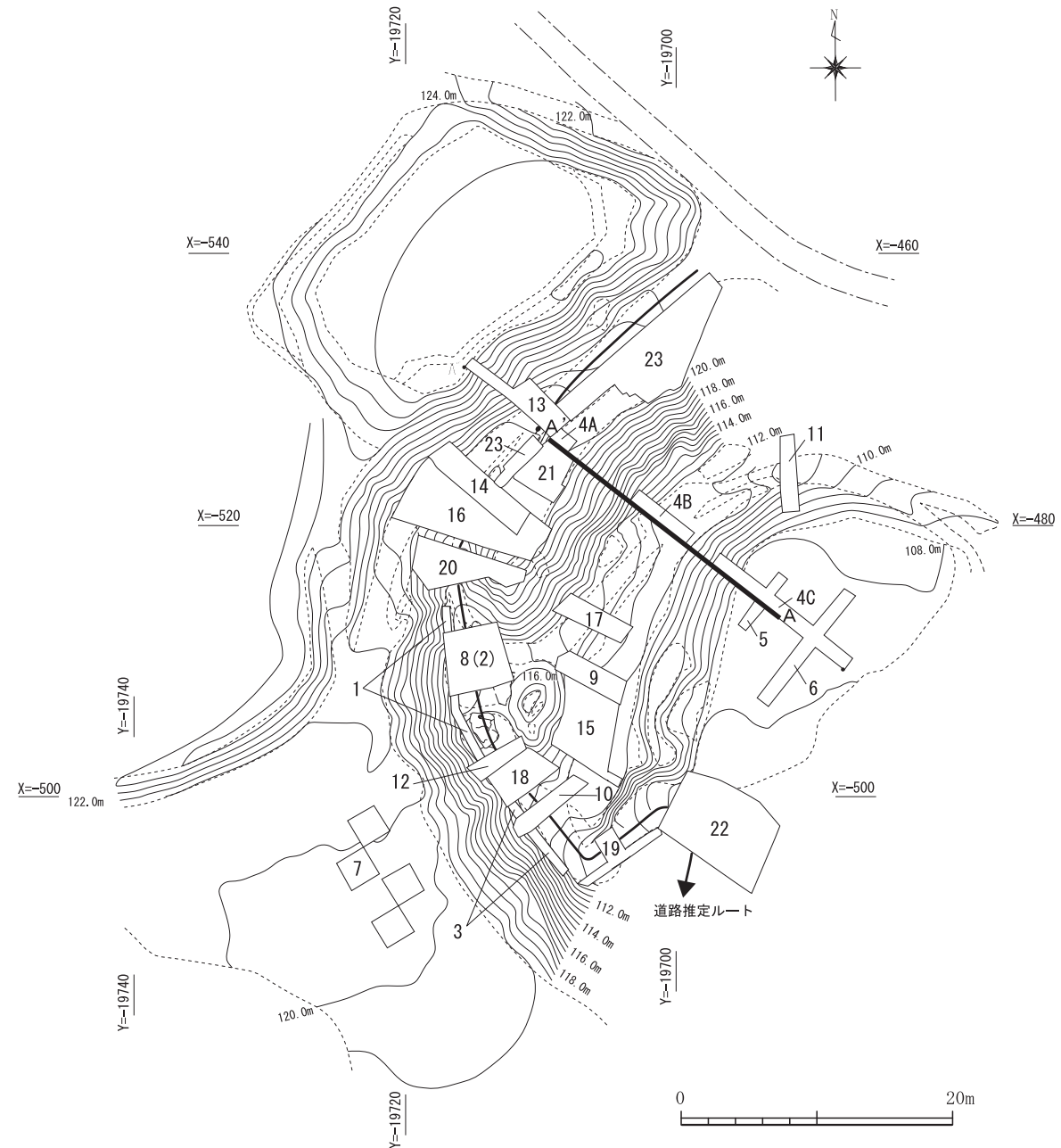
第7図 深迫門跡②

れ、比較的しまりの強い細層となることを特徴とする。土壘の裾部には、やや前面を揃えた約 30 ～ 40cm 大の安山岩系の扁平な割石で構成される石列が確認された（28 次 3・4・8 トレンチ）。また、土壘前面には、土壘裾部を覆うような形で、基底部に約 10 ～ 30cm 大の安山岩系割石や一部軽石を敷き込んだ盛土が検出されており、土壘本体を補強する盛土と位置づけられている（28 次 3・4・8 トレンチ）。土壘前面の柱穴列については、芯々で約 1.8 m 間隔に並び、南土壘で計 7 基、北土壘で計 8 基が検出されたが、一部には、土壘本体に柱半分が食い込むような形の柱痕跡が確認されている（28 次 4・5 トレンチ）。

（4）堀切門跡周辺（第 8 図）

堀切門跡は、南の外郭線のほぼ中央、南東方向に開口する谷部に位置する。もともと周辺は阿蘇溶結凝灰岩の崖地で、その崖地西側を掘り切って通路を通し、その通路の延長線上、丘陵頂部近くの傾斜変換点に城門の支柱穴が検出されている（22 次 16 トレンチ）。

平成 10（1998）年度の第 20 次調査の際、通路東側から残存高 12.8 m となる中位にテラスを持つ 2 段構造の土壘が検出された（20 次 4 トレンチ）。この土壘については当初すべて削りだし整形によるものと解釈されていたが、平成 12（2000）年度の第 22 次調査でその下段部分が盛土整形であることが指摘され、



第8図 堀切門跡

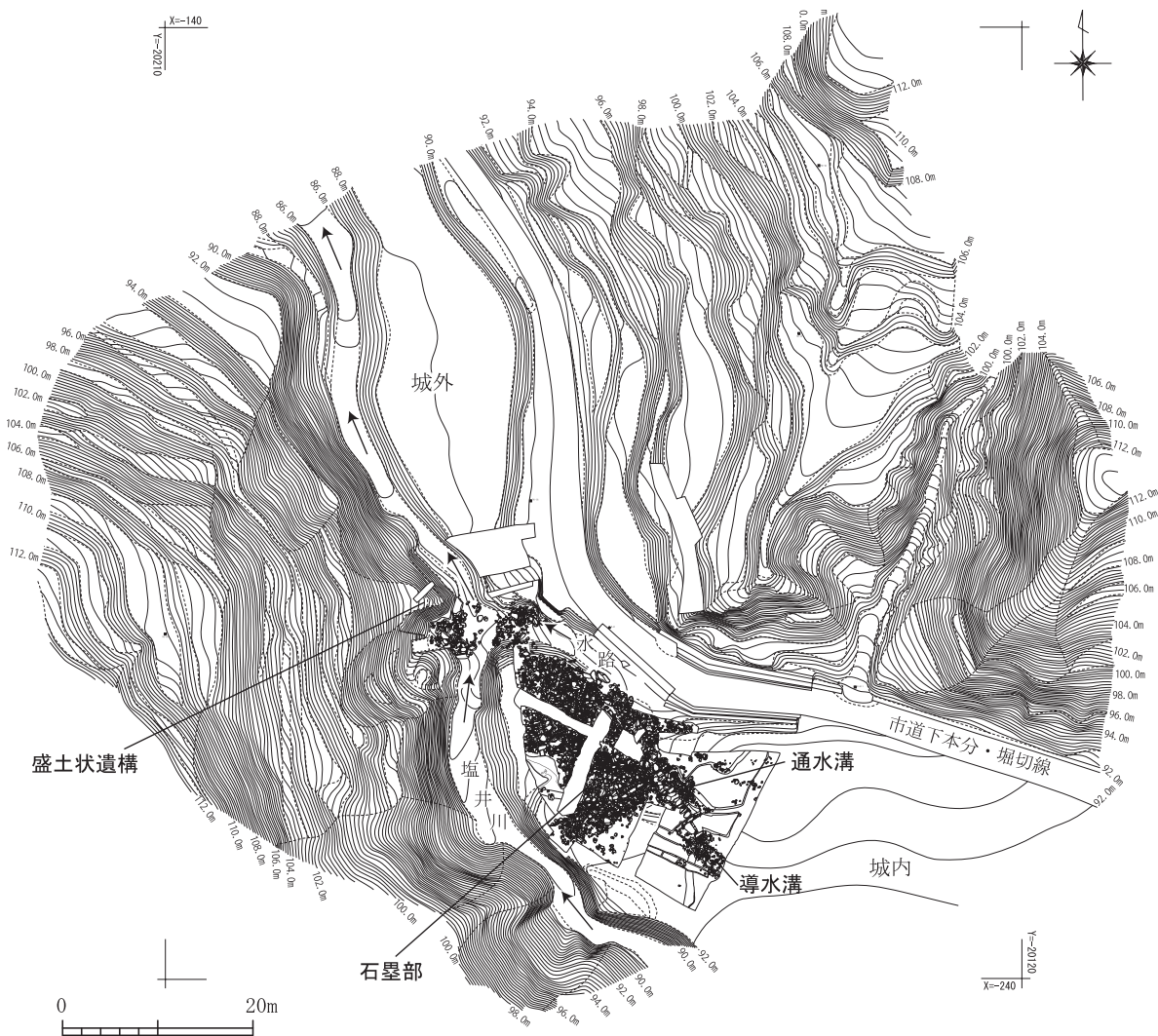
上段を削りだし、下段を盛土により整形した2段構造となることが明らかとなった。

(5) 池ノ尾門跡周辺 (第9、10図)

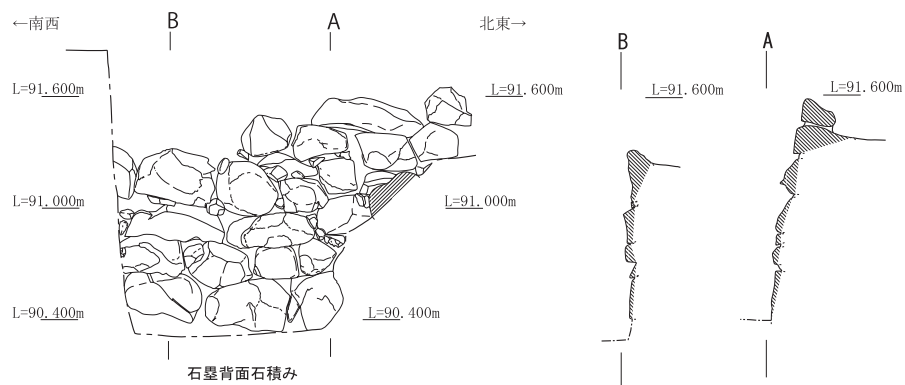
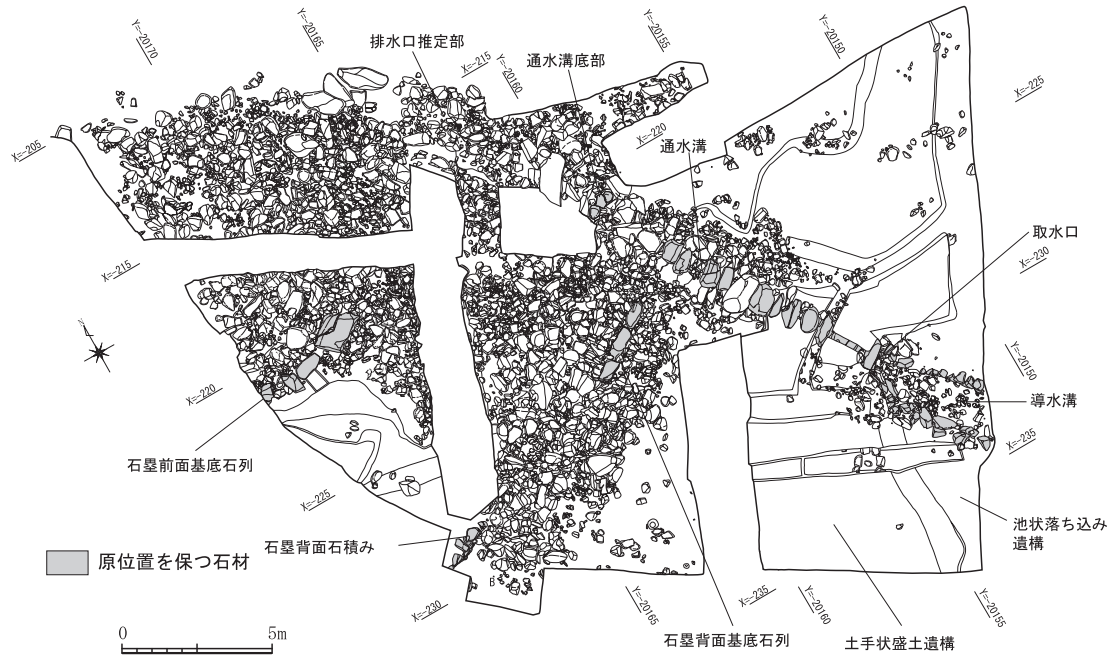
池ノ尾門跡は、南の外郭線から北に向きを変え斜面を下りた城域南側の谷部に位置する。その北東側には西側土塁線の灰塚から下りてくる尾根が迫り、その南下の市道下本分・堀切線上に城門が推定されている。

平成16(2004)・17(2005)年度の第26・27次調査では、城門推定箇所の南西側から、谷部を遮蔽する形で石塁基底部の前面・背面石列が検出され、石塁の存在が明らかとなった。石塁の規模は、残存長約12mで、幅約9.6mが想定され、南西端近くで城外側に向けて弧を描く平面形状となる。谷の最深部となる北東寄りに通水溝を付設する水門構造となるが、その通水溝の取水口が石塁背面から約7.5m城内側に位置することが特徴として挙げられる。また、その取水口の前面には幅1.2m程の導水溝が付設されている。平成22(2010)年度の第32次調査では、背面石列の西側延長線上から、残存高約1.35mの4～6段の貼石状の石積みが検出された。

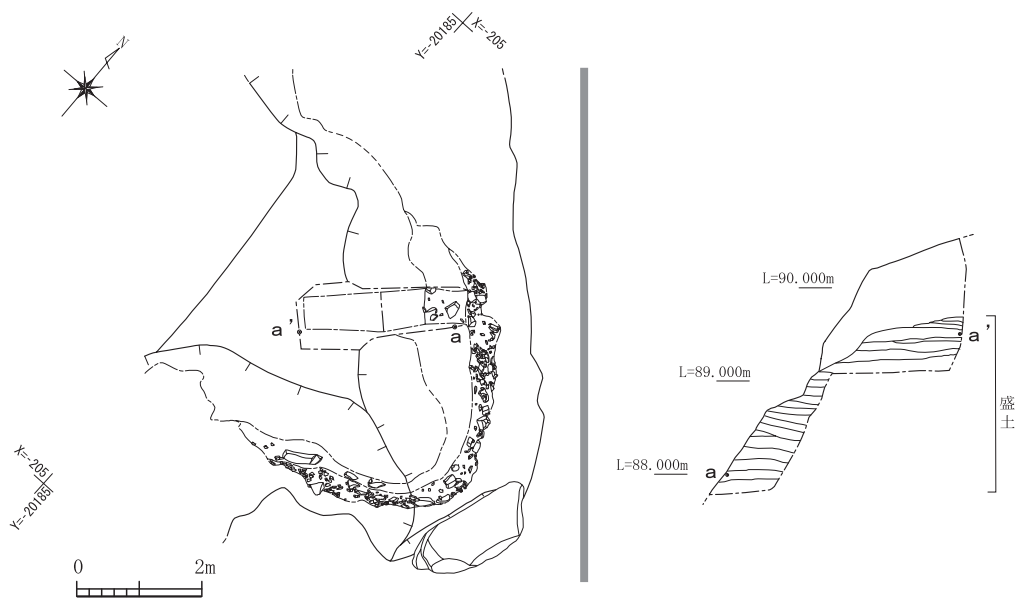
また、池ノ尾門跡周辺では、石塁の城外側約20m北西の地点に、基底部に礫・石を敷き込み、盛土を花崗岩バイラン土の細層で構成する盛土状遺構が検出されている。西側斜面に依拠する内托構造となるが、部分的な残存であるため、石塁に取り付く土塁なのか、あるいは谷部を遮蔽する土塁なのか、その性格の解明までは至っていない。



第9図 池ノ尾門跡①



石塁



盛土状遺構

第10図 池ノ尾門跡②

3. 土塁構築における諸特徴

鞠智城跡の土塁については、大別して、地山の整形面に依拠して構築する内托構造を持つ土段状の土塁と土塁頂部をさらに断面梯形状に盛土する半夾築状の土塁の2種が認められる。そのほとんどが前者と思われるが、南側土塁線西・東端部及び西側土塁線の最北端部などの一部に後者が認められる。そのうち南側土塁線西端部の南面する土塁については、削りだしと盛土を併用して整形する2段構造を採用しているが、これは、堀切門跡の土塁でも認められる構造であり、鞠智城跡における土塁構造の大きな特徴といえる。いずれも防御正面となる南側に面した位置にあることから、城壁高を高くすることにより南に対する視覚的效果を狙ったものと思われる。この2段構造については、上・下段とも盛土整形により構築されている点でやや様相を異にするものの、大野城跡・北石垣地区でも認められる。北石垣地区は、城域北側の二重に廻る土塁のうち内周土塁の中央に位置しており、北の福岡平野、玄界灘から見通せる場所にあることから同様の立地であることが指摘できる。

鞠智城跡の土塁の場合、先述したとおり各地点においてその形態・構造に微妙な差異が生じているが、これは土塁が構築される場所の機能や自然地形に起因するものと捉えることができ、基本的には同じ技術体系のもと施工されたものと判断できる。そのうち盛土整形については、西側土塁線北端部（佐官どん）及び深迫門跡周辺で検出された土塁前面の柱穴列の存在からそのほとんどが版築によるものと考えられる。その一方で、堀切門跡の2段構造の土塁における下段盛土では、各層が厚く、さほどしまりがなく状況が認められ、金田城跡・ビングシ山の北・南土塁で確認されている「互層積土」（古門ほか 2000）と同様の性質を持つものと考えられる。屋嶋城跡においても同様の盛土が検出されており、版築によらない別の工法が採用されたことが指摘されているが、同じ讃岐国内の讃岐城山城跡も同様の盛土を採用していることから讃岐特有の特徴の可能性も示唆されている（山元 2003）。いずれにしろ、鞠智城跡においても版築によらない別の工法の存在も想定する必要があるだろう。

版築による土塁の構築過程については、以前、西側土塁線北端部（佐官どん）の土塁について、切土、型枠、盛土の順で復元を試みているが、近年、大野城跡でも、平成 15 年 7 月豪雨災害復旧事業に伴う発掘調査の成果から土塁の構築過程の復元を行っている。それによれば、①地山加工→②基礎盛土施工→③堰板柱の建設（枠組工事）→④堰板固定→⑤材料巻きだしと突き固め→⑥堰板外し→⑦外被盛土施工（→⑦' 天端外被盛土施工）→⑧土塁上面立柱建設の順で施工され、④～⑦の工程は、一定の作業単位のもと反復されたものとしている（小澤ほか 2010）。この大野城跡における土塁の構築過程の細部をみていくと、鞠智城跡の土塁構築との類似性が多く指摘でき、鞠智城跡においても同様の土塁構築法が採用されたことが読み取れる。以下に、鞠智城跡における土塁構築に係る諸特徴について、見ていくことにする。

【基礎部の造成】土塁の構築における最初の工程として地山加工がある。丘陵尾根の外斜面を階段状あるいは鉤状に切土して整形するもので、上段を削りだしにより整形する2段構造の土塁においては、その削りだし整形も一体的に行われたものと思われる。地山加工においては、一部に南側土塁線西端部の支脈基部にあたる土塁（25 次 B 地点 6 トレンチ）で土塁頂部の盛土下面に黒色を呈する粘質土（旧表土）が僅かに認められるが、大野城跡と同様、基本的には表土を除去する意識が働いていたものと思われる。

こうした地山加工の後、基礎盛土の施工となる。この基礎盛土は土塁本体の基礎部として施工された盛土のことであるが、大野城跡の土塁でその存在が指摘されたものである。この基礎盛土については、鞠智城跡においてはさほど意識されてこなかったが、西側土塁線北端部（佐官どん）の土塁本体の下部に盛土が看取でき、これが基礎盛土に当たるものと思われる。この盛土は、比較的しまりのある粘質土、砂質土で構成されており、その堆積状況を見ると、大野城例と同様、地形の傾斜にあわせて斜方向に堆積し、その外側を徐々に厚くすることで盛土頂部を水平に保つ状況が読み取れる。ただし、この盛土は土塁前方下部にしか存在せ

ず、切土面と併せて基礎部を造り出していることが特徴として挙げられる。

現在のところ、こうした基礎盛土は、大野城跡、鞠智城跡のほか、他の古代山城では確認されていない。神籠石系山城の列石土塁の場合、列石下部に列石レベルを揃えるための盛土が一部で確認されているが、切土により平坦部を整えるのが一般的である。なかには、列石設置後に列石前面に堰板柱を建設するための平坦部を盛土により造成したものが認められるが、列石土塁の場合、列石が地山加工の奥壁の立ち上がり近くまで及ぶか、列石と奥壁との間にもう一石あるいは裏込めを充填するなどしてそれを基礎部としており、奥行のある大型石材を使用することについてもこうした事情によるものであろう。

【堰板柱の建設】 次に、堰板柱の建設となる。これは、版築工法に伴う堰板を留めるための支柱と考えられており、鞠智城跡においても、深迫門跡南・北土塁及び西側土塁線北端部（佐官どん）の一部で、その柱穴列が土塁本体前面で検出されている。その柱間寸法は、深迫門跡南・北土塁で柱痕跡あるいは柱穴の芯々距離で約 1.8 m 等間になるのに対して、西側土塁線北端部（佐官どん）で検出された 3 基の柱穴列では、芯々で約 2.1 m 程度となる。この堰板柱の柱間寸法についても、2.0 m 前後が予想される点で大野城例と近似する傾向にあり、鬼ノ城や北部九州の神籠石系山城で知られる約 3.0 m 等間とは明らかに相違する。この堰板柱については、深迫門跡の北土塁では土塁本体に半分埋まる形で柱痕跡が検出されており、施工後も立柱したままの状況であったことが明らかとなっているが、一方、西側土塁線北端部（佐官どん）では柱痕跡の有無及び埋土の状況から抜き取られた状況にある。後者の場合、工区毎に再利用していった可能性が指摘できるが、廃絶後に抜き取られた可能性も否定できない。

このほか、西側土塁線北端部（佐官どん）では土塁背面の柱穴列も検出されている。これは土塁前面の堰板柱が土圧で外側に倒れないように紐あるいは横板で引っ張るための控柱の柱穴列と考えられ、その柱間寸法は芯々で約 1.3 ～ 2.3 m を測る。この柱間寸法は、丘陵の尾根線が城内側に湾曲する部分では約 2.3 m と長く、尾根線がやや外に湾曲する部分では短い傾向にあり、土塁走行の線形に起因するものと考えられる。この柱も柱痕跡の有無及び埋土の状況から抜き取られたものと判断できる。

【土塁本体の盛土】 最後に、土塁本体の盛土の施工となる。鞠智城跡の場合、その基底部となる盛土及び切土面の直上に、しまりのある粘質土を敷き固めた状況が認められる。これは土塁本体との間に不透水層を設けることにより吸着力を高め、地滑り防止など基底部の安定を図るため施工されたものと考えられ、さらに、その外端に土留めのための石列を配することでより強固なものとしている。

石列については、深迫門跡南・北土塁、南側土塁線西端部、西側土塁線北端部（佐官どん）の一部で認められ、土塁本体の裾部に施工する一般的な構造と考えられる。ただし、各地点においてその様相に差異が生じており、深迫門跡南・北土塁及び南側土塁線西端部の石列では前面を揃える意識がやや見て取れるのに対して、西側土塁線北端部（佐官どん）では前面を揃える意識はなく、さらに大野城跡・大石垣上方内周土塁 E 区と同様、間隔を空けて配置されるなど、やや粗雑さがみられる。また、深迫門跡南・北土塁で安山岩質の扁平な割石、南側土塁線で凝灰岩軽石、西側土塁線で花崗岩の割石を使用するなど、石材についても各地点において相違するが、これは各地点において比較的採取の容易な石材を使用した結果といえる。

このほか盛土基底部で特徴的なものに、池ノ尾門跡の盛土状遺構がある。盛土の基底部に石・礫をバラス状に敷き込み、その上に盛土を施したもので、これはそれが立地する谷部という地形が起因しており、谷水を外に逃がす透水層を造り出すための工夫と考えられる。

このように盛土基底部を造り出した上で、地山加工で整形された切土奥壁の段に合わせながら、堰板固定、材料巻きだしと突き固め、堰板外しという工程を反復しながら土塁本体の盛土が行われたものと思われる。全体的に最下段が一番強固に仕上がっており、最上段は粘質土を主体として構成されることが特徴として挙げられる。最上段の盛土については、粘質土で不透水層を造り出すことによって雨水等による浸食を防ぐ役

割があったものと考えられる。また、土塁本体の盛土の使用土についても、石列の石材と同様に各地点において相違するが、それは土塁が立地する基盤面に起因するものと思われ、地山加工時の切土などで生じた土砂を使用するなど、比較的採取の容易な材料を使用した結果といえよう。

このほか、西側土塁線北端部（佐官どん）では、その一部で土塁背面裾部の石列が検出されている。この土塁背面の石列については、大野城跡・金田城跡・屋嶋城跡などで土塁背面に1～3段の石積みを伴う石列が検出されており、土塁背面の土留めの役割を果たすものなのか、あるいは区画を表すものなのか、今後検討する必要がある。

【補強盛土】深迫門跡の南・北土塁で、一部に土塁裾部を覆う盛土が検出されている。この盛土は、大野城跡で確認された土塁法面の保護あるいは基礎盛土平坦部の消失を目的とする「外被盛土」に類似するものと考えられる。深迫門跡南・北土塁の場合、その盛土基底部に地滑り防止のため10～30cm大の石を敷き込み、その上に盛土する状況がみてとれるが、この盛土は土塁全面を覆うようなものではなく、土塁裾部のみの施工と考えられ、土塁の基底部からの崩落を防ぐ根固め的な役割があったものと思われる。この盛土の施工については、前面柱穴列の柱掘方にまで石敷が及んでいない状況から土塁構築当初の施工と考えられ、少なくとも基底部の石敷については、堰板柱の建設前あるいは柱穴掘削と同時に施工されたものと判断できる。

4. 今後の課題

鞠智城跡における土塁構築の諸特徴をみると、天智4（665）年築城の大野城跡との類似性が強く、他の古代山城とは一線を画することは指摘できる。しかしながら、大野城跡における土塁の盛土と比べるとやや粗雑な傾向にあり、さらに版築によらない盛土が一部に想定される状況は、天智6（667）年築城の金田城跡、屋嶋城跡との関連が想起される。このことは、鞠智城の築城年代を大野城、基肄城の築城より遅れた時期とする見解を補うものとなり得るが、それが時期差なのか、あるいは地域差なのか、大宰府周辺から離れた肥後の地にある鞠智城跡の立地要件も踏まえて判断する必要がある。

鞠智城跡における外郭線の構築については、創建当初から急速に整備が進められ、それ以降大幅な改変は行われていないものと思われ、現在確認できる土塁は、概ね創建当初のものと捉えても大過ないものと判断できる。こうしたことから、鞠智城の築城年代を把握する上でも土塁構造のさらなる分析が必要と思われるが、現在のところ、情報量がそこまで達していないのが現状である。他の古代山城の土塁と比較検討を行えるまでの情報量が取得することが、鞠智城跡の調査・研究における今後の課題といえよう。

〈引用・参考文献〉

- 井上裕弘ほか 1984 『鹿毛馬神籠石―福岡県嘉穂郡潁田町所在鹿毛馬神籠石の調査―』 潁田町文化財調査報告書第1集 潁田町教育委員会
- 小澤佳憲ほか 2010 『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ―平成15年7月豪雨災害復旧事業報告―』 福岡県文化財調査報告書第225集下巻 福岡県教育委員会
- 草場啓一 2008 『阿志岐城跡―阿志岐城跡確認調査報告書―（旧称宮地岳古代山城跡）』 筑紫野市文化財調査報告書第92集 筑紫野市教育委員会
- 島津義昭 1983 『鞠智城跡』 熊本県文化財調査報告第59集 熊本県教育委員会
- 新原正典 1988 『鹿毛馬神籠石Ⅱ―福岡県嘉穂郡潁田町所在鹿毛馬神籠石の調査―』 潁田町文化財調査報告書第2集 潁田町教育委員会
- 末永浩一 2003 『唐原神籠石Ⅰ―福岡県築上郡大平村大字下唐原・土佐井所在山城の調査報告―』 大平村文化財調査報告書第13集

出宮徳尚ほか 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会

西住欣一郎ほか 2012『鞠智城跡Ⅱ - 鞠智城跡第 8 ~32 次調査報告 -』熊本県文化財調査報告第 276 集
熊本県教育委員会

古門雅高ほか 2000『金田城跡』美津島町文化財調査報告書第 9 集、長崎県美津島町教育委員会

向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝漣』14 号 古代山城研究会

村上幸雄ほか 1997「鬼ノ城 角楼および西門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報 7』総社市教育委員会

村上幸雄ほか 1998「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」『総社市埋蔵文化財調査年報 8』総社市教育委員会

村上幸雄ほか 1999「鬼ノ城 西門跡および鬼城山周辺の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報 9』総社市
教育委員会

村上幸雄ほか 2005『古代山城 鬼ノ城 - 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 -』総社市埋蔵文化財発掘
調査報告 18 岡山県総社市教育委員会

村崎孝宏ほか 2003『鞠智城跡 - 第 23 次調査報告 -』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故
創生館

矢野裕介 2005『鞠智城跡 - 第 25 次調査報告 -』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

矢野裕介ほか 2007『鞠智城跡 - 第 28 次調査報告 -』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故
創生館

矢野裕介ほか 2009『鞠智城跡 - 第 29 次調査報告 -』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故
創生館

山元敏裕 2003『史跡天然記念物屋島 - 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ -』高松市文化財
調査報告第 62 集 高松市教育委員会

山元敏裕 2008『屋嶋城跡Ⅱ - 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ -』高松市文化財調査報告
第 113 集 高松市教育委員会

渡邊芳貴ほか 2005『永納山城跡 - 平成 14 年度～ 16 年度調査報告書 -』西条市埋蔵文化財発掘調査報
告書 西条市教育委員会

渡邊芳貴ほか 2009『史跡永納山城跡Ⅰ - 水門・城門・内部施設等確認調査報告書（平成 18 ～ 20 年度
調査） -』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集 西条市教育委員会